

先行したりしてゐる事は、所謂歴史性に對する一般讀者の理解を困亂せしめる恐れなしとしない。更らに又全巻を通じて多少の系圖を適用する事や、圖版の選擇と製版の技術に今少し慎重を期する事等も望ましい點であつた。

因みに「日本文化の發達」に就いても、明治以後に關する論述が補填され、年表・系圖・圖版等が挿入されるならば、より親しみ易い國史讀本たり得るであらう。

（國史概説・A 5 版・四八〇頁・文部省編・内閣印刷局發行・價三・〇〇—日本文化の發達・B 6 版・三三五頁・大阪柳原書店發行・價二・三〇）（内藤光）

### 修驗道史研究

和歌森 太郎著

修驗道は現にいまも、わが國民の一部に脈々として生きてゐる特殊な修業の道である。古來すくなくからざる人々がこの道に參じ、これを通じて日本文化發展の様々な面に關與するところがあつた。修驗道史の研究が、日本民族文化史の一課題としてとりあげらるべき當然の理由が、こゝに存したのである。然るに從來かくの如き意味に於ける研究が、わが國史の學界に殆ど示されてゐなかつたと言つてよい。あるものは、わづかに修驗道信仰實踐者への入門書であるか、さもなければ極めて限られた範圍に於ける部分的研究にすぎなかつたのである。

和歌森氏の新著「修驗道史研究」は、この言はゞ専門史家の斧鋸が、いまだ充分に及んでゐなかつた領域に對して、あくまで根本史

料によりつゝ開拓の歩をすゝめられたものとして、その勞を多としなければならぬものである。本書はその内容を四章にわかつてゐる。第一章の修驗道の由來は、役小角と上代山岳宗教より説き起して、奈良・平安時代に及び、時代の推移と共に、悠長的入山を脱して抖擻修業の傾向を強め來る過程を論じてゐる。第二章の修驗道の成立と特性には、鎌倉初期に於ける山臥の特異性の成立と教團的組織の成立をのべる。第三章は、教派修驗道の形成を説き、第四章には中世修驗道の近世的變質に及んでゐる。而して結語に於て氏は、修驗道史が日本文化全體の上に占むる意味を究明しようとして、試みられてゐるのである。

かやうにして本書は、修驗道の歴史的展開の上に一應の筋道を立て、その文化的意義を究明せんとされたところに、大いなる特色を示してゐるものである。而してまた出來得る限り、確實な根本史料に立脚せんとされた點、さらに修驗道史の展開を、一般時代思潮の發展との關連の上に把握せんとされた點にも、國史學徒としての正しき方法によられてゐると言はねばならない。この意味に於て、かゝる眞摯な特殊研究をもち得たことを、われわれのこよなきよろこびとしたい。とは言へ、修驗道史の研究がこれを以て終れりとすべきでないことは、著者自身も認められてゐるところである。蓋し修驗道は、英雄・天才・偉人等の創造になる高度の精神文化とは異り、氏の所謂民俗的基層文化の性格を多分にもつてゐる。しかしまた他面に於て、所謂表層文化との關係も放つべからざるものであること、これ又氏の論述によつても明らか

である。従つて所謂表層文化の修驗道への働きかけが考へられるばかりでなく、修驗道より表層文化への影響も亦かへりみられねばならないであらう。これを具體的な一例を以て言へば、修驗道の日本文學や藝術に對して有する關係の如きも、残されてゐる一つの課題ではないであらうか。いまこゝに新しい領域の研究に歩を進められた氏か、さらにかやうな方面へも觀點をむけられ、修驗道史研究を大成されんことを祈つてやまないものである。

(A5版・三六〇頁・河出書房・四圓五拾錢(高瀬重雄)

## 近世支那經濟史研究

小竹文夫著

本書は『經濟史上に於ける近世支那社會の性質』以下六編、何れも主として清朝經濟史に關し、已に定評ある著者の既作・既發表の勞作を一書に纏められしものである。が、各篇の排列に一貫せる有機的關聯性を賦與せしめられたる本書を手にする時、又自ら別個の興趣を催し、著者自らは是等諸論文を骨子として他日を期して居らるゝ「支那經濟史」の構想は、已に其の輪郭、彷彿たるものがある。

即ち、初篇『經濟史上に於ける近世支那社會の性質』は、著者の『近世支那社會の經濟發展段階上に於ける地位』の規定に關する論考であつて、今日、最も普遍的に行はれて居る封建社會説及び特殊社會説の二者に對する批判を展開しつゝ、自らは是を『君主專制的官僚政治の時代なり。』と、規定せらるゝものであり、已に著者累次の著作、講演・座談・討論に反復主張せられて居る所

であるが、卷頭に此の一篇を掲げられしは歴史學が文化科學としての自らの地位を主張する以上、歴史記述に於て精査嚴密なる概念規定の前提せらるべきを憶はれての意圖に基かれしものならんと推察せられる。尤も此の規定は、著者の『現代支那社會論』に對する西田太一郎氏の批評(『東亞人文學報』二卷一號昭十七、三三)等にも窺はるゝ如く、今日、未だ必ずしも一般的なる賛同を得ては居らぬ。が、著者の實證的研究の成果として到達せられし歴史理論たる事を憶ふ時、此の論考は高く評價せらるべきであらう。

次篇『明清時代に於ける外國銀の流入』に於ては、明末以降、清道光以前に於ける外國銀の對支流入量を測定、その總額大約三億五千萬弗の多きにのほりし事を概算し、『近世支那社會をして漸次銀貨國たらしめし要因は、加藤繁博士の銀鑄開發説と共に、實に銀の對支流入の齎せるものたりし事。』を説かれ、次で『清代に於ける銀・錢比價の變動』に於ては、名目貨幣たると共に、未だ實質貨幣たる性格を脱却し得ざりし清朝の法貨たる『銀兩』(制錢)間の市場比價の騰落常なき様相を、清朝一代を通じ順を追ふて跡付けられしもので、要約すれば清初より嘉慶末年に至る間、兩者の均衡を得しは乾隆二十八・九九年及び嘉慶元年のそれも極めて短時日であり、其他は苟且も休む間なき騰落を反復しつゝ、道光中葉以降、アヘン輸入の盛行に伴ふ銀の對外流出を契機として錢價の大暴落を將來し、やがて咸豐に入り銀の流入期に再會して稍々小康を得るが、光緒に入り支那が世界市場の一環としての關聯性を深めると共に當時の世界市場の銀價低落銅價昂貴の潮流の中に吸